

# 令和へつなぐ 「軍都」唯一の戦争遺跡

「戦争の記憶」

高校や大学など教育施設が集まる市川市国府台地区。緑も多い文教地区の、県血清研究所跡地の一角に「赤レンガ」の倉庫がひっそりとたたずんでいる。戦前から戦中にかけて旧日本陸軍の武器庫だったとされ、同市が「軍都」だったことを令和に伝える唯一の戦争遺跡だ。所有する県が売却を検討し先行きが不透明な中、歴史の「証人」を後世に残そうと市民団体が活動を続けている。

国府台地区は1885（明治18）年に下士官を育成する「陸軍教導団」が設置されたのを皮切りに、陸軍病院や砲兵、工兵の部隊などが置かれ、太平洋戦争終結まで「軍隊の街」として発展した。

2階建ての赤レンガ倉庫（延べ床面積約320平方メートル）は明治20年代の建設とされ、れんがは希少な「フランス積み」。旧陸軍の武器庫に使われ、戦後はワクチンを製造する県血清研究所の倉庫として使われてきた。2002年の同研究所閉鎖に伴い、敷地は立ち入り禁止に。11年の東日本大震災を耐えた赤レンガ倉庫

## 市川の歴史後世へ

### 赤レンガをいかす会



「赤レンガをいかす会」の高木さん

も活用されることなく、時間だけが流れている。市民団体「赤レンガをいかす会」は赤レンガ倉庫に歴史的価値を見だし、保存と利用を求めて、10年に発足。同会の共同代表、高木杉夫さん（81）は「周囲にあった軍隊関連施設が教育施設に変わっていった。赤レンガ倉庫が残っているの

旧陸軍の武器庫とされる赤レンガ倉庫（赤レンガをいかす会提供）

は奇跡的。歴史的にみても格化していくという。残すべき建物」と強調する。地元の市川市は前市長時代に見学会に合わせて敷地後初の記者会見で、あらた未使用の県有財産として敷地の処分に向けた準備を本



## 「平和実感できる場所に」

保存に向けて手詰まり感が漂うが、同会は「赤レンガ倉庫を市民が集まる場所に」と再利用方法の模索。敷地全体も含めた保存活用プランをワークショップ形式で考えている。同ショップには地元大学生も参加し、「新しい芽」が育ちつつある。高木さんは「会が発足して10年もたつと、メンバーも高齢者が増える。世代交代の意味もあるが、若者が入ることはもっと意味がある」と話す。

戦後74年がたち「軍都」の記憶も薄れた今。明治から昭和の戦争に使われた赤レンガ倉庫を歴史の証人として令和に伝え、そして、その令和を担っていく若者たちと市民が憩い平和を実感できる場所に変えていきたいとの思いが深いからだ。「せつかく残った赤レンガ倉庫をもっと活用して、令和にも生かしていかなければならない」（市川支局長・町香菜美）